

令和8年新春

地蔵様とあじさいの寺

光照寺だより

しょうぼう そうじょう 正法と相承

曹洞宗は、お釈迦様からその弟子、次の弟子と正しく伝わった仏法を心の拠り所として、坐禅を主体に日々の生活で禅を実践することを旨としています。

正法御和讃の歌詞は、正しい法（正法）を正しく伝える（相承）ことの意義を説いたものですが、実はメロディーを変えてそのまま宗歌ともなっています。一行目の「花の晨に片頬笑み」は、お釈迦様が一輪の花を手にして微笑まれた時、迦葉尊者だけがその意を理解してうなずかれた。そこでお釈迦様は迦葉尊者に自分の二代目として仏法を伝えたという故事をもとにしています。（拈華微笑）

二行目の「雪の夕べに臂を断ち」は、中国の禅の開祖達磨和尚に弟子入りを何度も断られた慧可という人が自らの臂を切断して達磨様に差出し、決心の硬さを示して弟子を許され、中国禅の二代目として達磨様の法を継いだという故事のことです。（慧可断臂）

宗門では、この故事のように正しく次の代、そのまた次の代につなげ送り続けていくことを大切にしています。住職交代の儀式である晋山結制はまさしくこの体现式です。

家を次代につなげていくことが難しい昨今、寺院もまた同様です。住職の最も大事な任務は弟子を育てることだと言われています。光照寺は幸いにも若和尚が頑張ってくれています。光照寺の法と山風は正しくつながっていきます。（年頭の挨拶に代えて 方丈）

曹洞宗宗歌

梅花流詠讃歌『正法御和讃』

はな あした かた ほ え
花の 晨に片頬笑み

ゆき ゆう ひじ た
雪の 夕べに臂を断ち

よ よ つと みち
代代に伝うる道はしも

よ そ たぐい あらいそ
余処に比類は荒磯の

なみ え たかいわ
波も得よせぬ高岩に

かきもつくべき

のり
法ならばこそ



大般若法要



地藏様の頭巾を縫う会



草取りボランティア活動



TV 撮影の様子 (Teny 新潟一番)

若和尚 千葉で修業中

昨年の盆明けに、若和尚夫婦は千葉県の宗門寺院に修業に出かけました。主にその寺の檀務や葬儀の手伝いをしながら将来の住職としての見識と技量を高めてくれることでしょう。

数年は帰らず修業と仕事をする予定です。正月や盆も帰れませんが大般若には顔を見ることができると・・・。



光照寺公式
HP ⇒



ご家庭に不要のローソク・線香がありましたら、お寺に寄付していただければ幸いです。四月の地藏講に使わせていただきます。